

ケンブリッジその後

藪 下 信*

ホイル教授がケンブリッジのプリアン天文学教授職を辞し、マンチェスターに移ったことは大きな論議をまきおこしたが、最近、筆者が友人から伝え聞いたところによると、後任の人事選考が行われ、一応この事件も表面的には、決着をみることとなった。

理論天文学研究所の設置が話題に上ったのは何時ごろのことか、筆者は詳細を知らないが、ホイルやボンディの間で話が出ていることを伝え聞いたのは1964年であったと思う。そしてサセックス大学という案もあったそうであるが、結局ケンブリッジに設置されたのは1966年であった。英国の大学、特に古い大学は拡大することに頑強に抵抗するので、この研究所は大学の機関とは認められはしたものの、運営の費用は、最初、ウォルフソン財団からの寄附によってまかなわれた。その後、大学自身の予算から一部とSRC（科学研究評議会）からの援助とで、運営されて来たが、残念なことに今年度でもって、打ち切られることとなった。

ホイル自身の仕事からも分るように、理論天文学では、大量の数値処理をする必要にせまられることが多い。恒星系の力学・星の進化等々である。当時、これらのトピックを専攻している学生を多く指導していたホイルは、電子計算機の必要を痛切に感じており、いつでも好きなだけ計算機を使えるような場所を、ホイルが求めていたことは確かである。しかし、理論天文研では、それ以上に、一般相対論的天体物理学や宇宙論の分野で、いくつかの興味ある研究が行われ、また夏期には海外から多くの研究者が集り、白熱する議論が行なわれたことも確かである。光学のリンフォット博士は筆者に、過去十数年の間に、ケンブリッジで行なわれたいい仕事は、分子生物学と天文学の分野であると語ったことがある。また、CITのW. ファウラー教授がスコット講演（毎週一回、計三回）をした後で、ピバード（キャベンディッシュの物理学教授）は、「天文学がこのように興味あるものとは充分理解していなかった。しかし、理論天文研の将来を討議している委員の一人として、委員会がその将来に、好意的な結論を下したことはここで報告してもよいと思う」と述べたことからして、当然存続することと思われた。しかし、その後理論天文研と、天文台が併合さ

れ、天文学研究所として再編成され、その初代所長（任期二年）にリンデンベルが任命され、このことがホイルの辞任につながったことは、記憶に新しいであろう。

ホイルの後任にえらばれたのは、M. リースである。彼は未だ30歳前後であるが、英国では高く評価されており、いろいろな議論でも核心をついた批評をするので、その将来に、多いに希望をたくしてよいであろう。ただ問題なのは、SRCも援助を行わず、大学としても従来、天文台運営に出していた予算以上は出さないとすると、天文研のスタッフの数は大幅に削減されることになり、教授及びその他のわずかの恒久的なポストを持つ教員以外は、他所に移らざるを得なくなることである。このことは、理論天文研で行なわれた研究の内容と考え合わせると、大変残念なことと筆者には感じ取られるのである。今後も何らかの形で理論天文研のグループが存続し得るよう願っている。

雑 報

冥王星のえんべい

英国のゴールデン・テイラーは手紙によって、2月4日に、冥王星が17等の恒星（赤経： $12^{\text{h}}41^{\text{m}}15^{\text{s}}.36$ 、赤緯： $+13^{\circ}50'07".1(1950.0)$ ）をかくす可能性があることを予報し、東京天文台へ協力をよびかけて来た。

えんべいの時刻は、オーストラリアで $17^{\text{h}}30^{\text{m}}$ 、ジャワで $17^{\text{h}}33^{\text{m}}$ 、インドで $17^{\text{h}}39^{\text{m}}$ （いずれもUT）であった。日本においてこの現象が観測できるかどうかは予報の精度によるが、堂平観測所、岡山天体物理観測所、東京天文台（三鷹）はこのために協力の体制をとった。

三鷹における冥王星の位置観測と堂平における光電測光観測は一応のデータがとれた。

冥王星は約14等、相手の恒星は約17等で、光電測光のモニター用記録紙からただちにわかるような光の変化ではないため、目下くわしい解析がなされている。

* 京都大学工学部数理工学教室